

地域での立ち位置を見極めることから始める。
一人でも多くの方の、かかりつけ医となるために。

【医療人インタビュー】

こま内科呼吸器内科 院長
(千葉県千葉市)

駒崎 義利



政令指定都市・千葉市の大動脈であるモノレール「タウンライナー」で、千葉駅から7駅。みつわ台駅を降りて徒歩1分。豊かな住環境で人気のみつわ台団地のあるこの地に、2017年4月、呼吸器専門医の駒崎義利氏が院長を務める。

こま内科呼吸器内科が開院した。地域のかかりつけ医として広く、長く愛されるクリニックとなるべく、日々誠意ある診療を展開している。

文清水洋一 写真タカオカ邦彦

**継承による開業
建物も、電話番号も、診察時間も
徹底して引き継ぐと決めた**

こま内科呼吸器内科は、玄関脇にカーポートを備えた白塗りの瀟洒な2階建ての一軒屋である。看板表示がなければ、医療機関であるとはわからないだろう。

「築40年以上経っていることに気づかない方が多いのではないのでしょうか。デザインが素敵で、しかもしっかりと造りに私も驚いていますし、感動しています。」

ここを建てた入枝先生(前院長)が、ご自身の考えをふんだんに盛り込んで設計を進めたのだそうです。そのセンスがすばらしかったんですね。とくに、玄関・待合室はガラス張り、建物内がとても明るいのが気に入っています。

その言葉からわかるとおり、駒崎氏は継承による開業を選択した。

「前院長は40年にわたり、この地で小児科と内科の医療を展開していました。高齢になり後継者もない事情と、開業をめざしていた私の考えが幸運にも合致し、継承することになったのです。私は、前院長が築いた信用と信頼を、可能な限り引き継ぎ、継続しようと考

えています」

その「引き継ぎ」の意思の表れの一つが、施設の扱いといえる。

「できるだけ手を入れずに使うつもりです。そうすれば、患者さんが、以前と同じ雰囲気を受診できるはずですから。」

ちなみに、電話番号は変えていませんし、診察時間もまったく同じままにしています。診察室にある院長のデスクも、ここが建った時から使っていた木製のもので、同じ場所に設置したまま使わせてもらっています。

現在、開業から約8か月経っていますが、いまだに以前の医院名で電話がかかってくる。私としては織り込み済みの現象で、電話を受けた者がその都度、クリニック名が変わり、院長が代わったことを知らせています。そういった作業は数年続ける必要があるでしょうね。自分の「色」を出すのは、そういった電話がかかってこなくなっただけでいいと思っています」

継承に関する意思は、かなり徹底している。

「ここを継承する話が持ち上がった際、拙速にならないよう、約半年間、非常勤として外来のコマをいただき、実際に診察しつつ、入枝先生の診療方針も見聞させていただきました。」

その時間を経て2人は意気投合しましたし、私は先生を心から尊敬するようになりました。小児科の診察技術も伝授していただきました。

それで、開業に際してはまず、先生のやってきたことをいかに継承できるかに注力しようと決めたのです」

前院長は小児科を標榜していたが、専門性を強く押し出すことはせず、内科医、家庭医として家族ぐるみで頼れる医療を展開していた。

「お子さんだけでなく、その親、そのまた親と、3世代にわたって健康管理を引き受けているご家族がたくさんいらっしゃいました。そこには信頼に裏打ちされた深い絆のようなものがあり、大きな感銘を受けました。どこまでできるかはやってみたいとわかりませんが、できる限り同じようにしたいと思いました」

真摯な姿勢が際立つ。

「昨年まで16年間勤務医であった私には、地域医療において開業医がどうあるべきかという問いに、今すぐ答えられる見識はありません。いつか自信をもって示せる信念を身につけたいとは思いますが、それまでは日々勉強です。暗中模索を覚悟しています。」

ですから、まず徹底して継承に努力しようと思っています」



こま内科呼吸器内科

〒264-0032 千葉県千葉市若葉区みつわ台2-38-10

診療科目：小児科、一般内科、呼吸器内科

診療時間：9:00~11:30、15:00~17:30

休診日：木曜、土曜午後、日曜、祝日

TEL：043-253-8382

http://koma-naika.net

一人でできないことがあると認め、アドバイスを耳を傾ける出会いの幸運に感謝する

漠然と開業を意識した当初、選択肢の一つとして医院継承という手法があることは知らなかった。知識と情報、コンサルタント会社からもたらされた。

「勤務医というのとはとにかく時間と心の余裕をもちにくい生活になりがちです。一人ですること、考えられることには限りがあります。

今回の開業にあたり、継承という道があることも、私一人で構想していたら気づくことすらできなかったかもしれない。サポートし、アドバイスしてくれた総合メディカルの担当者さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。おかげさまで、よい出会いに恵まれたのだと感じます」

駒崎氏との会話には、「出会い」への感謝の言葉が何度も登場した。

「私の医師人生は、それなしでは語れないと思います。局面局面で出会いがあり、アドバイスをいただき、そのおかげで、結果的に後悔のない歩みを書いたのです」

外科志望から内科志望へ
専門科選択に際しては「おもしろくなさそうな科」を選ぶと決意

駒崎氏は2001年大学卒。現行の初期臨床研修制度が施行される、3年前だ。

「私たちは制度の過渡期の世代です。ただ、臨床医として幅広い見識を身につけるべきだという考えはすでに広く認知されていましたから、卒後はまずスーパーローテーションに入ることを決めていました」

駒崎氏が選んだのは、出身校ではなく、出身地が近い千葉大学医学部医局。この選択法は、すでに現在の初期研修医と変わらない。

「とにかく、どうすればよい臨床医になれるかを最優先に考えて行動するつもりでした。誰もシンプルな一発解答など与えてはくれないものですから、少々苦労は多くても、手探りしながら答えを見つけていかなければと思っていました」

2年間、千葉大医局の人事で関連病院を回り、3年目からは医局を出て自ら勤務先を探した。ほぼ現行制度の後期研修医と同様の動きをしている。

「最初の2年間は外科を志望していた

のですが、志望を内科に切り替えると同時に医局も出ました。自分で病院を探し面接を受けました」

そして、専門を呼吸器内科と決めていくわけだが、その思考法が独特だ。

「卒後すぐに、外科医をめざして研修生活に入りました。結論として、それは自分に向いていない分野だとわかったので内科に切り替えたのですが、専門科選択に際しては「最もおもしろくなさそうな科にすべきだ」と決意していました」

その真意は？

「ことはなんでもあれ、学ぶにあたって苦労や挫折はつきものです。楽しいことばかりではない。それに相對する際の覚悟のようなものについて、自己分析した結果がそれでした。私は夢いっぱい外科学を志望し、わくわくする気持ちが大きかった分、挫折で大きくつまづいてしまったようなのです」

内科での専門科選択には、その反省をいかすべきだと思っていました。少々へそ曲がりだとは自覚しています」

あまり一般的とはいえないが、冷静な分析と自分への厳しさは理解できる。

そして、卒後5年目から呼吸器内科の道を歩み始める。この節目には、大きな出会いのエピソードがある。

「卒後5年目に勤務した都立病院の呼

本人はさかんに幸運を口にしているが、己を信じ、常識にとらわれない進路選択のできる意思の強さがあつての道のりだろう。

紆余曲折の医師人生 苦勞もあつたが、充実感をいざ今後もこのスタイルで邁進する

そして今、駒崎氏は生まれ故郷である四街道市にほど近い、みつわ台で地域医療の担い手となった。開業1年目に描く医療のビジョンはどんなものなのか。

「まずは、この地域にどんなニーズがあつて、自分がどんなふうに関与できるのか、立ち位置をしっかりと理解し、見極めていこうと考えています」

そのために継承に注力する。

「前院長がこの地で築いた業績は、本当にすばらしいと思います。幸いにしても多くの患者さんが引き続き当院の門を叩いてくださっているため、それが手に取るようにわかります」

その引き継ぎにあれこれと努力しているうちに、立ち位置も見えてくるでしょうし、次の時代にふさわしいスタイルも見いだせるのではないのでしょうか」

医局を飛び出し、医局に入局し直し、

呼吸器科は、東京医科歯科大学の医局から医師が派遣されていました。当初、呼吸器科は「おもしろくなさそう」なので選んだのですが、私を導いてくださった先輩方がいました。しかも、呼吸器医療を教えるばかりではなく、医局への入局までも誘ってくださったのです」

千葉大医局を出てフリーだった駒崎氏が、東京医科歯科大学へ。

「当初、医局に所属することに懐疑的な私でしたが、入局してみても、先輩も上司も皆すばらしい方で

価値観の大転換は、さまざまな変化をもたらした。

「たとえば、医学博士。医局同様に、博士課程にもあまり大きな意味を感じられず、興味そのものがなかったのですが、ある先輩に「内科医は、エビデンスについてちゃんと説明できるロジックを持っていたほうがいい。そのためには、エビデンスの成り立ちを学ぶ必要があるんだ」とアドバイスされ、目が開きました」

卒後10年目にしての大学院入学は、一般的なキャリアパスからすれば、早いとはいえませんが、自然に受け入れられてもらえました。つくづく、良い環境に巡り会えたのだと幸運に感謝したものです」



左/クリニックの入り口はレンガ壁。ベンチが備えられている。右/ガラスが多く使われており、院内は明るく風通しが良い。内装は継承後一切変えておらずレトロ感もある。



上/待合室にはベビーベッドも。下/診察室。机などの設備も引き継いだ。



駒崎 義利(こまき よしとし)

- 2001年 千葉大学医学部附属病院、関連病院
- 2003年 都立病院
- 2006年 東京医科歯科大学呼吸器内科、関連病院
- 2014年 柏市立柏病院 呼吸器内科医長
- 2017年 こま内科呼吸器内科 開院

ですから、この後も、やり方は変わらないですね。何かがあるかは予想もできない。不測の事態も訪れるでしょう。目の前に現れる課題に、全力で取り組めば最後には克服できると信じています」

実際に、不測の事態はもう起きていたという。

「秋口に、喘息の患者さんが突然増えたのです。継承が第一と思いい、得意分野についてのアナウンスはあえてしてこなかったのですが、フタを開けてみるとこんな現象が起きています。つくづくわからないものだと思います。診察した患者さんの口コミでしようか。たぶん、そうなのでしょうね。地域医療の現実を肌で感じた、よい経験といえますね」

そう笑顔で語る駒崎氏が、試行錯誤のなかから独自のスタイルを見いだす日はそう遠くないだろうと確信した。